

道

駒
田
隆

一九三〇年一月二六日、わたしは、東京市芝区愛宕町で、兄とは九つ違いの次男として生まれています。

この年には、一月にロンドン軍縮会議が開かれ、わが国もこれに調印して、世界平和の一步が進められました。国内では反対が多く、騒然となりました。また、四月には、東京市電の労働者一万三千人が賞与削減に反対してストライキを実施し、五月には、大学教授らが共産党シンパとして逮捕されたり、キリスト教五団体が、政府の神社参拝強制に考慮を求め、一月には浜口首相が、東京駅で暴漢に襲われ、重傷を負いました。このような騒然たる世の中に生を受けたのです。

父は、わたしが二歳の時に四六歳で病死しており、母が、父のやっていた新聞販売業を引き継いでいました。わたしが覚えてるのはその頃からで、父は、写真でしか知りません。そのお店は、新橋にあり、浜松町駅から近かったので、芝公園や、旧芝離宮恩賜庭園や旧浜離宮恩賜庭園などが遊び場所でした。お店の人に連れられて、ブランコに乗っていて、落ちて出来た傷が今でも残っています。

母は、映画やお芝居が好きだったようで、後でその話をよく聞かされました。お店の隣

りの古着屋さん、ご飯屋さん（？）、前のレコード屋さん、パン屋さんなどが今でも目に浮かびます。そのパン屋さんに、よくパンの「みみ」をもらいに来る人がいたのも、なぜか思いつきます。幼稚園の行き帰りに通る閻魔堂の閻魔さんの顔の怖かったこと、そんなことも思い出の一つです。

やがて、母は、お店を手放して、品川の方へ越しました。そして、兄の成長を楽しみにしながら、会社勤めをしました。しかし、その兄も、結核のために一九歳で亡くなりました。母は、どんなにがっかりしたことでしょう。後で、よく兄と比較されて困ったことが多くありました。なにしろわたしは、勉強よりも、父や、兄が残した本、文学全集や推理小説、歌舞伎の物語など、分かりもしないに夢中になつて読んでいたのですから。『モルグ街の殺人』で手ほどきを受けた推理小説は、わたしの好きになつた読書の一分野です。

時代は、盧溝橋事件（一九三七年七月・日中戦争の発端）など、だんだんと戦時色が濃くなり、教育勅語は丸暗記を求められ、歴代天皇の名前も暗記させられました。天皇は現人神であり、神国日本は無敗である、と皇国史観で教え込まれました。担任教師は海軍軍人あがり、精神棒と称する檜の棒をいつも持ち歩き、一人の生徒の失敗はクラス全員の連帯責任と称して、全員尻を叩かれました。

こうしてわたしは、いやでも軍国少年として成長していったのです。

一九四一年一二月八日早朝、ラジオのけたたましい声が、日本軍の真珠湾奇襲攻撃の勝利を放送しました。小学六年生のわたしは、勝利の放送に万歳したものでした、それまでの授業や新聞で、鬼畜米英の悪逆非道さを嫌になるほど聞かされていたのですから。学校へ行っても、誰も日本の勝利を疑いませんでした。

四月になって、旧制中学校へ入学しましたが、入学当初あった英語の授業は、敵国語だから、となくなりました。代わりに増えたのは、軍事教練です。重い三八銃を担がされて、毎日銃に剣をつけて突撃練習や、当時小石川にあった射撃場での実弾射撃、靖国神社参拝です。勉強などほとんどしませんでした。

そして、戦況が思わしくなくなって、授業も週に一日あるかどうかになり、勤労働員と称して、軍需工場での旋盤やボール盤の仕事が与えられました。そして、空襲の延焼を防ぐため、と称して家屋の強制破壊です。わたしたちは、家屋の柱に、綱を巻いて家屋を引っ張り倒しました。大本営発表では勝利の連続なのにどうして、と疑問を持つようになるのは当然です。衣料や食糧なども配給制になり、お米のご飯など、贅沢になってきました。かぼちやの葉っぱまで食べるようになったのです。

一九四二年四月、東京が初めて空襲され、母とわたしは、知人に手伝ってもらって、庭に防空壕を造りました。動員先の工場も爆撃を受けるようになりました。

一九四三年二月、ガダルカナルから日本軍撤退、五月にはアツツ島守備隊全滅、とひしひしと、日本は米英連合軍に包囲されつつあったのです。でも、わたしたちは何も知らされませんでした。軍事教練も多くなり、予科練（海軍飛行予科練習生）、軍関係の学校、少年兵への勧誘も増えてきました。わたしは目が悪くて兵科は無理だったので、軍の経理学校の入学願書をもらってきて、母に叱られました。

そして、一九四五年三月九日深夜から翌日にかけて、死傷者一二万名余を出した、江東地区の大空襲を迎えたのです。母は、翌日知人の安否を尋ねに出かけましたが、その酷さに啞然となって帰ってきました。

わたしもまた、昨日まで談笑していた友人の何名かが登校せず、言葉がありませんでした。四月には沖繩にアメリカ軍が上陸し、五月二四日夜にわが家も空襲にあい、母と焼夷弾の降る中を逃げ出しましたが、途中では母とはぐれて、このまま、母と会えなかつたら、と悲しい思いで夜を明かし、焼け死んだ真っ黒な死体を見ながら我が家を目指し、焼けた家の前で母と会った時には、ただ黙って手を握りあうだけでした。

空襲で焼け出されたわたしたちは、約二ヶ月防空壕生活をしていましたが、七月になって、母の姉や姪のいる茨城県の石岡という町へ疎開することになりました。最初は、姪の家の一部屋にいましたが、そのうちあちこちの家の一間を借りて転々と移りました。学校も水戸の学校に転校しましたが、ここでも日常は、学校田の手入れや、日立製作所の海岸工場での作業でした。しかし、その工場も艦砲射撃や、一トン爆弾で壊滅的破壊を受けました。一トン爆弾の空襲の日は、生徒は休みだったので被害に遭わずに済みました。

そこへ、あのヒロシマ、ナガサキへの原爆投下のニュースが入ってきたのです。もちろん、原爆とは言わずに、ただ、「新型爆弾」が両都市を襲ったということだけでした。しかし、噂はあつという間にその被害のひどさを伝えてきたのです。そしてあの日、一九四五年八月一五日、戦争終結の玉音放送が流れました。何も言葉がありませんでした。ただ、これで東京へ帰れるかな、という思いがふつと浮かびました。しかし、現実は厳しく、預貯金も紙くず同然となり、生活を維持するのがやっと、というわが家のどん底生活が始まったのです。

学校では、鬼畜米英が、民主主義とかいうお手本の国に変わりました。今までの価値観

が逆転したのです。旧制中学から新制高校へ学校も変わります。勉強したくて、一番月謝等が安い大学を探し、京都の立命館が安いとわかりました。しかし、慣れない鋤を持って働き出した母にとても言えませぬ。わたしも働くことを決意して、県職員の試験を受けましたが、決まるまで八百屋のアルバイトをし、自転車にリヤカーをつけて、近在の村から野菜を運びました。しかし、ある時、坂道で自転車のブレーキがきかなくなり、そのまま坂の下まで転んで行ったこともありました。

幸い県職員の試験に受かって、当時新しくできた水戸の保健所に配属されました。保健所は、焼け残った建物にあり、その一隅に住んでいた高校の先生に、マルクスの『資本論』を始め、出隆の哲学書など借りて、わたしの共産主義への傾倒が始まったのです。まだ一六歳でした。環境が激変している時に、それは干天の慈雨のようにわたしの乏しい頭に浸透し、東京の友達に、天皇制打倒の檄文をぶつけ、職場では、「回転椅子の諸公よ」とアジプロを始めました。

旧制水戸高校の、夜間のマルクス経済学公開講座にも皆出席です。三木清の『人生論ノート』も並んで買いました。母は、わが家の乏しいおかずを削ってもっと貧しい人に分けるような人でした。そんな母を見て、わたしはますますマルクシズムに傾倒していききました。「世界の労働者よ、団結せよ」、マルクスの声は神の声でした。

何とか薄給の中で本を買っていたわたしにとって、長谷部文雄訳のマルクスの『資本論』を買った時の喜び（仙花紙の粗末な本でしたが）、そして夢中になって読み、難解と言われるこの本を読み終えた時の嬉しさは忘れることが出来ません。この本は、今でも保存してあります（もう七十年近くになります）。

そんな時に、姉のように慕っていた（初恋かも）人から、高価な「経済学辞典」を贈られて、参考に出来たのも嬉しかったです。そして、仲間と一緒に頑張って同人誌を出し、「唯物証法講話」など書いたのですから、若いということは、恐れを知らない時でした。転職も視野に入れて、一週間のストライキも計画しました。しかし、朝鮮戦争の勃発と同時に、今までのような甘い環境でなくなりました。いわゆるレッドバージと言われる、共産党員追放の嵐が吹いたのです。県職員にもその風は吹き始めました。わたしはまだ、党員ではありませんでした。その頃、共産党自体が、中国派、ソ連派と別れて争っていたので、変だなどという気持ちがあったので入党には踏み切れなかったのです。

当時、岩波書店の『世界』という雑誌を定期購読していましたが、お店の人が、警察が購読者を調べに来たよ、とそっと教えてくれたので、やられるかな、と思いましたが、幸

い小者の私には、パージの風は通り過ぎて行きました。

その頃、職場の薬剤師の方が、わたしを見て危なっかしく感じたのでしよう、教会へ行くことを勧められました。最初は抵抗を感じたのですが、何回も言われるうちに、一回ぐらいは行ってみるか、そんな気持ちかわいてきました。保健所の土曜の宿直を代わりに引き受けて、日曜日の朝、その人が勧められる日本基督教団水戸教会の前まで行くのですが、やはり入れずに何回か繰り返し返しました。

ある日、教会の前でその人に見つかって、礼拝に出るようになりました。二〇歳の頃でした。そして、聖書研究会にも積極的に出席するようになったのです。

教会の鈴木浜牧師は、わたしに優しく接せられ、理屈で押すわたしに、静かにキリストの愛を説かれたのです。

先生は、伝道とは、「・・・あの時代（イエスの時代）に語られたメッセージが、今の時代に、この世に対して何を語っているか……聖書の地層深くボーリングしていき、そこからわき出てくるつきない真理の泉を汲みだし、いのちのましましみを、求める人々に価なしに与えることではないでしょうか・・・」（『神の作品―ローマ人への手紙講解説教Ⅱ』二六一ページ）鈴木浜著＊ヨルダン社・一九七九年）、と言われるような温厚な方でした。わたしは、良い先生にめぐり会えました。

鈴木先生に導かれたわたしは、組合運動を離れ、少しは仕事に向かえるようになりました。当時、保健所では、「人口動態統計」という仕事を担当していましたが、統計という仕事には、数学が必要でした。ところが、数学は苦手で、幾何平均や算術平均の区別もままならず、慌てて数学の基礎から学び、何とか必要な資格も取って仕事も楽しくなりました。

そして、二一歳の時に鈴木先生のもとで受洗しました。仕事も水戸から地元の保健所へ転勤しましたが、その翌年、母は、長年の苦勞が身にしみたのでしよう、病気で倒れ、気がついた時には、半身不随の体でした。幸い、母の姪が近くにいたので、わたしが日中留守の時は面倒を見てくれたので助かりました。そのうち、小一時間かかる銚田にあった県の総合事務所に転勤しました。しかし、母の病状は良くならず、冬は、暖房しても温まらないような隙間だらけの部屋では、ただ泣きたい思いでした。見かねた姪が、アパートの六畳の部屋を見つけてくれ、かつての上司も、近くの部署に転勤できるように、アドバイザーしてくれました。

そんな時に、母がいつも面倒見ていた人が、黒い飴玉を持って見舞いに来てくれた時は、人の心の温かさをつくづく知りました。こうして、みんなに助けられて、ただただ感

謝でした。

わたしは、鈴木先生が石岡の幼稚園で伝道をされていたので、そこへ出席するようになり、日曜学校で子どもたちと遊ぶようになりました。そのうち鈴木先生は、大阪の大きな教会に転勤され、その後任の牧師が、別に石岡に出張伝道されていたので、その伝道会に出席していましたが、ある時、わたしの献金が少ない、と詰問され、この苦しい時に、と思つてその集会を去りました、しかし、神のお恵みでしょうか、鈴木先生のと幼稚園で伝道されていた、日本バプテスト同盟潮来教会の小野一良先生に巡り合い、信仰の道を再び歩み始めました。小野先生は、神学校を卒業して、自転車で日本全国を、人形を抱えて巡回伝道をされていた方です。わたしは、日本クリスチャン・ペンクラブの池田先生といい、恵まれた先生方に節目、節目に会えて幸いでした。わたしの信仰生活において、鈴木先生、小野先生、池田先生は、神から与えられた命の糧だったのです。

母は、六年間寝ていました。今考えると、母も苦しかった、と思います。自由に動けないことがどんなに情けなかったか、今みたいな介護制度もなく、苦渋の日々だったと思います。でも、みんなに温かく見守られて、六四歳で召天しました。親孝行な息子、と世間は見ていたようですが、わたしは悔やむだけです。今でも、母のことを考えると、泣けてきます。何一つ満足に出来なかったことを。

母が死んで約一年間、わたしは一人でした。何をするにも、誰に気兼ねもなく、全く自由でした。でも、それだけ寂しかったのです。そのため、仕事以外に熱中したのは、読書と映画鑑賞です。それも、いわゆる高尚な、ということではなく、その時、その時の好みに任せていたのです。ただ、それでも、幼稚園の日曜学校だけは、毎週欠かさず出かけて、聖書のお話をしていました。小野先生の伝道集会にも出ていました。それだけが、好きだったのかもしれない。臨海学校の夜、子供たちと一緒に寝て、いい思い出が残りました。今でも、スーパードなどで、昔の生徒、今ではいいお母さんに声をかけられて、はて、どの子だったかな、と一瞬戸惑うことがあります。そして、幼稚園の先生たちとも、友達になりました。

結婚は母の死後一年経った、一九五九年一〇月でした。わたしが二九歳、彼女が二一歳でした。それまでも、親孝行な息子？という肩書きで、姉妹の内どちらでも、などと話がありました。断っていました。ところが、ある時、風邪をひいて寝ていた時に、園長先生に言われて見舞いにくってくれた、幼稚園の先生と意気投合して、その人と結ばれたのです。妻は、ピアノが弾きたくて、保母の学校へ通っていた時に、ピアノが弾ける人を探

していた、その園長先生の目に留まったのです。わたしと同じように、東京で戦災に会い、お父さんの出身地だった前橋に疎開していました。ピアノが好きだったので、音楽には目がありませぬ。東京にいた頃には、当時流行っていた「歌声喫茶」の常連だったようです。今でも、当時の「歌声喫茶」の歌集が残っています。

結婚するまで、何ヶ月かありましたが、当時のわたしは音楽と言ったら、せいぜいミュージカル映画のファンだったくらいで、あまり詳しくもありませんでした。でも、ラブレター？の文面に、好きだったロシア民謡の、「ともしび」を書いたことがありました。そのせいでしょうか、金婚式記念に作ったオルゴールの曲に妻が選んだのは、その「ともしび」のメロディーでした。

わたしは、彼女と話ができるように、なんとか音楽の、クラシック音楽になじもうとして、とにかく、レコードを集めて聞こうと思いい立ち、無理をして、安いオーディオ・セットを求めたのですが、さて、何を聞くかと考えたら、とても交響曲など一タにしては無理なので、シヨパンのピアノ曲に焦点を絞って聴き始めました。それも、ルービンシュタインの弾くシヨパンに焦点を絞って、彼のレコードを一枚、また一枚と買い集め、聴きだしました。そして、シヨパンの世界の入り口に立ったのです。

結婚してすぐに、一回で当たるはずがない、と思っていた市営住宅に当たって大慌てでした。それでもなんとか引越して、新生活が始まりました。妻は、幼稚園の先生として、わたしは、新しい職場の新しい仕事に、それぞれ、全力を注いだのでした。やがて、二人の息子を与えられ、とにかく忙しい日々を送りました。わたしの仕事も、庶務的なことから、専門的仕事に移りました。レコード収集も、オーディオ・セットの高級化も拍車がかかりました。それに、買った本で部屋も狭くなって、とうとう無理して家を建てました。

仕事も、人事委員会事務局というところで、十一年間も落ち着いていました。その間に、職員の給与関係、不利益処分に関する審査、採用関係などいろんな仕事を経験させてもらいました。審査関係の仕事をしている時には、職員組合の幹部とマルクス論争を思い出を作ることができました。そして、収用委員会という、個人の土地を、公共の目的のためその人の意思に関わらず強制的に買い上げる、というような仕事も経験し、権力の行使は、いかに慎重に行わねばならないかを学びました。

また、環境関係の仕事も四年間行つて、公害問題の大切さも知り、さらに、管理職として、後継者の育成が、大きな仕事であることも学びました。

妻もまた、幼稚園の中堅として、後輩を指導するようになりました。この幼稚園は、もともと牧師先生が始めた幼稚園でしたので、キリスト教保育の幼稚園でした。わたしもまた、一緒に日曜学校のお手伝いをして、臨海学校や、遠足の付き添いも、いい思い出になりました。そして彼女は、ハンド・ベルも学ぶようになったのです。やがて幼稚園を退職した妻は、請われて、障害者施設で、ハンド・ベルを施設の子たちに教え始めました。最初の頃は、よく子どもたちに手をひつかかれて爪痕が赤く残っていました。公開演奏会では、子どもたちと笑顔で演奏していました。また、自宅でもピアノ教室を始めました。

子どもたちも、どうか大学を終えて、それぞれの道を歩き出しました。その間にわたしは、県の東京事務所に移り、陳情の仕事の介添えや、折衝事務に中央官庁の間を飛び回り、二年間たつて人事委員会事務局に戻り、そこで退職して、県の外郭団体に再就職し、四年間東京勤務をしました。

そんな合間に、妻や子と旅行をし、子どもが大きくなってからは、妻と二人で旅を楽しんでいました。でも、妻は、だんだんと体の不調を訴え、血小板に異常があることがわかり、入院を繰り返すようになったのです。

日本クリスチャン・ペンクラブにお世話になったのは、わたしが六〇代の頃だったでしょう。満江先生が御健在で、熱海で、毎年研修会をしていた頃です。そこで、多くの方と語り、また、教えを頂いて、視野を広めることができました。「あかし」文章という分野も教わりました。そして、今に至るまで、ペンクラブのいろんな方から刺激を受けて、未知の世界を知ることができました。

そんな時に、金婚式を終えてまもなく、妻は、天国に召されて行きました。わたしにとって、まだまだこれからも妻と一緒に、と思っていました。これも神さまの思召しだったのでしょうか。わたしはまた、一人になりました。幸若舞の『敦盛』の一節に、「人間五十年、下天のうちにくらべれば夢まぼろしの如くなり、一度生を受け滅せぬ者のあるべきか」とありますが、理屈でわかっている、悲しいものです。

しかし、いつまでも悲しんでいては、妻に笑われてしまいます。もつと、もつと、新しいものを求めて、次の讚美歌のように漕ぎ出すことにしました。

大波のように

作詞者、作曲者不明

大波のように 神の愛が

わたしのむねに 寄せてくるよ。

漕ぎ出せ漕ぎ出せ

世の海原へ。

先立つ主イエスに

身を委ねて。

大波のように 神の愛が

わたしのむねに

寄せてくるよ。

「『讚美歌第二編・一七一番』」

あと一年余で卒寿を迎えるわたしにとって、いつまで漕ぎ続けられるかわかりませんが、神さまが、必要な時を与えてくださることでしょう。それを信じて、ただ漕ぐだけです。そこには、きっと、憩いの時が待っていることでしょう。それまでは、わたしの時を十分に味わいたい、と思っっています。

愛唱聖句（新共同訳聖書）

*テサロニケの信徒への手紙五章一八節

どんなことにも感謝しなさい。

*マルコによる福音書四章九節

聞く耳のあるものは聞きなさい。

*ヨハネの手紙一・四章八節b

神は愛だからです。

愛唱賛美歌（讚美歌 第二編）

*一七一番 大波のように

*一七五番 深い川を越えて